

機構共通研究施設（分子科学研究所関連）

統合バイオサイエンスセンター

本組織は、分子科学、基礎生物科学、生理科学の学際領域にまたがる諸問題に対し、総合的な問題意識と方法論を適用、駆使することによって、新しいバイオサイエンスを切り開く事を目的として設立された機構共通の研究センターで、生物諸科学、医科学のみならず、化学、物理学をも内包する研究課題をとり上げていく事が期待されている。岡崎の3研究所と連帯を密にしなが、人事交流も含めた研究展開をはかり、研究課題は5年毎に見直すことになっている。



（左から） 上野隆史、木下一彦、渡辺芳人、北川禎三、藤井浩

本センターの研究は、生命現象の基本に関する諸問題を分レベルから細胞、組織レベルまで統合的に捉える基礎研究を中心にする。具体的には、発生、分化、再生等の時系列的に沿った生命現象、情報の発生、伝達、応答など生体分子の構造と機能の解明を図る戦略的方法論、生体を取り巻く環境因子とその応答など生命環境に関する諸問題、を各々中心課題とする3つの研究領域を置く。一研究領域は3人の専任教授と2～3人の助教授から成り、生命環境研究領域のみ客員教授と助教授が1人ずつついている。

分子科学研究所関連で新規に選考したのは戦略的方法論研究領域の教授で、慶應大学理学部から木下一彦博士が4月1日付で着任された。一分子観測の国際的第一人者であり、プロトンATPアーゼのF1部分が回転する事を目で見えるかたちで示された研究で世界に知られている研究者である。E地区の新しい建物が完成する平成14年3月から岡崎で本格的にこの種の実験をされる。それ以外のメンバーは本研究所からの振替えであるので、その研究内容はここで新たに紹介しないが、戦略的方法論研究領域に相関領域研究系の渡辺芳人教授と分子物質開発研究センターの藤井浩助教授、生命環境研究領域に分子構造研究系の北川禎三教授が加わっている。また、客員教授と助教授は生体情報学とでも呼ぶべき理論グループに当てられていて、分子科学の分野では名古屋大学大学院理学研究科の齋藤真司助教授が加わっておられる。センター長は平成13年4月から2年間、永山國昭教授（生理学研究所兼務）が務められる。